

柏亭本『うつほ物語』(広島大学蔵)の特色(その三)

—春日詣巻(付「桂」の段)—

猪 川 優 子

はじめに

本稿は、広島大学附属中央図書館が蔵する柏亭本『うつほ物語』(写本全二十冊)についての第三次調査報告である。これまでに、⁽¹⁾第一冊俊蔭巻から第三冊忠こそ巻について、書誌および前田家本との異同を中心とした本文の内実の紹介を終えており、本稿では引き続き、第四冊春日詣巻についての調査結果を報告する。

まず書誌を記す。保存状況および本の体裁は、前三冊とほぼ同様の形態を有しており、表紙左肩に「うつほ物語」^{■書誌}と墨書された題簽が貼られている。見返しに使用されている料紙は前後ともに本文共紙であり、反古紙とみられる前見返しの料紙は、墨付部分が見えないように袋綴にして表紙の裏に貼り付けられている。⁽²⁾丁数は、二十四丁(その内墨付二十二丁、遊紙前後各一丁)である。また、これまでと同様、本文冒頭頁左肩の余白に「第四春日詣」と、背巻および巻名が墨書されているのであるが、この第四冊には、背

に「うつほ物語」と墨書されている。

続いて和歌の表記法にふれる。第四冊においても、和歌は一、二下げで書かれており、〈一行型〉〈二行断続型〉〈三行連続型〉の三つの型に和歌を分類した場合、⁽³⁾第四冊の和歌六十九首のうち〈一行型〉が六十八首、〈二行連続型〉が一首(「白露の」の歌)となっている。前田家本は、〈一行型〉が六十八首、〈二行連続型〉が一首(「人知れず」の歌)である。わずかな差異が認められるものの、両本ともほぼ〈一行型〉の体裁を採っている。

次に、第四冊に付されている巻名「春日詣」について記す。『うつほ物語』は巻序・巻名が諸本によつて異同がみられ、この巻についても「梅の花笠」という巻名を冠する本が存する。⁽⁴⁾また、『河海抄』巻第二帚木並空蟬巻の並事の条には「第三の並春日の祭」と見え、『花鳥余情』第二十若菜下に「うつほ第三かすかの祭」と見える。柏亭本は前田家本と同じく、忠こそ巻に続く第四番目の巻として春日詣巻が位置しており、このことは両本が近いことを示している。ただ柏亭本には、前田家本の巻名に付されている「た、こそそのならひ」という注記はみられない。

また、柏亭本の春日詣巻については、中村忠行氏⁽⁵⁾が「宇津保物語に関する展観書目録(附解説)」において「書写は新しいが本文は古形を伝へ、春日詣巻『さほ姫の』の歌も正しき位置に在る」と指摘しておられる。「さほ姫の」の歌は、『本文編』一四九頁にある源師澄の歌であり、流布本系の一部の本において、位置の乱れが認

められている。この箇所は、柏亭本では乱れや注記等のみならず、問題のないことが確認出来る。

以上、第四冊春日詣巻の書誌についての報告を終わる。続いて本文の特色について、その内実をみていく。前三冊と同様、前田家本との異同を中心に本文を辿っていくこととする。

一 柏亭本と前田家本との異同

前稿において柏亭本第二冊藤原の君巻と第三冊忠こそ巻が、前田家本と近い位置にあるという事が確認された。本稿で扱う春日詣巻は、忠こそ巻に続く第四冊目であることと「春日詣」という巻名であることから前田家本に近いことが予想される。以下、これまで同様、両本の異同について幾つかの項目に分けてみていくこととする。本文の引用に関しては、上段に柏亭本、下段に前田家本を配し、括弧内に『本文編』の頁数と行数を示した。また私に、異同部分に傍線を付し、必要に応じて句読点および鉤括弧を付した。

(一) 前田家本にない語句が柏亭本にある例

春日詣巻においても、藤原の君巻以降の流れを受けて、特に顕著な例はみられない。以下、任意に幾つか例を示し、説明を加えた。

①「あなかしこ。——「あかしこ。(一五六頁17行)

②ゑかにおはしましたる人々に、——ゑかにおはしたる人々に、(一四六頁10行)

③年いつく計にて——としいつくにて(一五四頁18行)

④白きうち袴をなん給ける。——しろきうちはかまを給ける。

(一四六頁11行)

⑤けふの為にあかす心細き事——けふのため、あす心ほそき事

(一五六頁13行)

⑥のかたに御さい給はりて、——のかたに給はりて、(一五六頁10行)

⑦御すいしんとねりとも、「是は何そのおこなひ人ぞ。——御す

いしんとねりともは、「なにそのおこなひ人ぞ。(一五二頁10行)

⑧今は、高き位にも成なまし」など思ふ。されと——いまは、た

かきくらみにもなりなまし」など、されと、(一五七頁5行)

①は、前田家本が誤りであると思われる例である。②は、柏亭本に

おいて特に必要のない語句であると思われる。③は、『本文編』に

おいて「歳五つにて」と校訂されている箇所であり、忠こそが母に

死に別れたのは五歳の時であるため、「計」の有無は文脈に支障を

来さないと考えられる。④は、係り結びに従うと、「なん」のある

柏亭本の方が適当である。⑤は、「か」の有無によつて意味が異なる。

『うつほ全』では該当箇所の頭注で「なまじ今日会つたために、

かえつて明日から心細い気持ちになるの意の諺か」と推測されている。

柏亭本の場合は、おそらく「飽かず」という心細さの強調で捉

えているのであろうと考えられる。⑥は、『本文編』において「か

のかたにみさい給はりて」と校訂されている箇所であり、『うつほ

全』で「かの方に御先賜はりて（私の屋敷に一緒に来ていただきたい）とされてゐる箇所である。この校訂は柏亭本と一致する。⑦は、両本で鈎括弧の位置が少し異なると考えられるが、文脈上の大きな違いにはつながらない。⑧は、『本文編』では「なと思ひ、されと」と校訂されている。これは「思ひ」を加えて文が続く形に処理しているのであるが、柏亭本の場合は「思ふ。」と一度文を切っており、そのまま文脈が整っている。

(2) 前田家本にある語句が柏亭本にない例

春日詣巻における該箇所は、以下に挙げる二例である。

① たけひとしくえらひたり。——たけひとしく、すかたひとしくえらひたり。(一四五頁13行)

② たゝこそのをこなひゝと——かのたゝこそのをこなひゝと(一五二頁17行)

どちらも柏亭本における脱落とみられるが、②の場合は文脈に大きく影響することはない。①の場合は、表現の重複が少し気になるところであり、検討を進めたい。

(3) 柏亭本と前田家本とで文の続き具合が異なる例

該箇所は数例みられ、以下、任意に挙げる。ここでは校訂本文と照らし合わせてみていく。

① 心つくろひせさらんやは「などの給。かゝる程に、——こゝろつくろひせさらんやは」などの給ひ。かゝるほどに。(一四七

頁1行)

② さるは、二葉にもと思給へゝる物を」とて奉れ給。あて宮み給て、——さるは、二葉にもと思ひ給つるものを」とてたてまつれ給て。あて宮み給て。(一四七頁7行)

③ 「あやしく、み奉る心地するかな。——「あやしく、見たてまつり心ちするかな。(一五四頁8行)

④ なかより、「つかうまつりにくきことかな」といひて書出す。——なかより、「つかうまつりにくき事、かならず」といひてかきいたす。(一四七頁12行)

①は、『本文編』において「などの給ふ。」と校訂されており、柏亭本文と一致する。②も同じように『本文編』において「たてまつれ給ふ。」と校訂されている。③の場合、「見たてまつりし」と校訂されている。柏亭本の場合は、校訂することなく文脈が整っている。④は、前田家本の場合、「つかうまつりにくき事」と慎重な構えを見せながら「必ず」と続けるのは、和歌に長けている者としての自負を表しているともとれるが、少し違和感があるように思われる。更なる検討を要する。

(4) 柏亭本と前田家本とで語句が異なる場合

ここでも藤原の君巻以降の流れを受け、それほど目立った異同はみられない。音韻については、前田家本で「へいしう」(「陪従」一四五頁5行等)と統一されているのが、柏亭本では「へいちう」「へいしう」「へいしやう」と不統一であることが指摘できる程度である。

それでは以下に、文脈上意味にそれほど相違の見られないものを、任意に数例挙げる。

①花をのみむらこにそむる春雨はときはの松やつらくみゆらん
——花をのみむらこにそむる春雨はときはの松はつらくみゆらん
ん(一四九頁12行)

②あはせの袴一具——あかせのはかまひと具(一五四頁6行)

①は、前田家本に「は」の重複が見られる。『本文編』・『うつほ全』ともに校訂されていない。この箇所は、柏亭本と同じく「や」を有する本文と、「の」を有する本文が存する。重複を避けることを考慮に入れると、「や」が適当かと思われる。②は、『本文編』において「あか色」と校訂されている箇所である。物語本文には、「袷(あはせ)の袴」・「赤色の袴」ともに用いられており、どちらが正しいとも言えないのであるが、柏亭本の場合、校訂を加えなくとも意味が通る本文である。

続いて、文脈上意味が異なるものを取りあげる。

①四位より始、もろ人に給。——四位よりはじめの人に給。

(一五〇頁2行)

②かたへは恥わすれにて侍になん——かたへはらちわすれにて侍になん(一五四頁4行)

①は『本文編』において「四位よりはじめての人に給。」と校訂されている。ここは、諸説わかれているが、柏亭本の「諸人」も、一つの案として候補に加えられるのではなからうか。②は、「うちわ

すれ」と校訂されており、『うつほ全』頭注では「帝の御前で弾かないのは、一つには、忘れてしまっているからなのです」という意味ではないかとされている。これは、帝の御前で忘れてしまっているものを何故弾けるのかという疑問が残る。頭注では、脱文の想定や「いらへ」の誤りと見る説も挙げられている。柏亭本では、ここで「恥わすれ」という語を用いている。これは、「帝の御前で弾く」というのは、恥を忘れるということになるからです」という意味にとれようか。更なる検討が必要である。

最後に、前田家本・柏亭本ともに大きな脱落が推定されている箇所を指摘しておく。仲頼の提出した和歌の題の内容に含まれる、「春の雨にくれなみのむめ色いで、花風をそく、しるきむめおとるへたり」(一四七頁17行)と、「まとゐにたらぬ月、をくれたるつき」(一四八頁7行)の二箇所が、『本文編』において補われている。

以上のことから、春日詣巻がかなり前田家本に近いことがわかるが、箇所によっては、それぞれ独自の解釈で本文を立てているといえる。どちらの本文を採用するのが良いのかという判断が出来かねる場合もあるが、一つ一つ吟味していく必要があると考える。

二 欠字および空白箇所について

春日詣巻には、数箇所の欠字および空白がみられる。これは、前田家本・柏亭本ともにみられ、以下に列挙する。(それぞれ、『う

つほ全』の頭注を付した。(

①かくて 廿三日のひつしの時計になん、——かくて〈空白二字〉廿三日のひつしの時はかりになむ、(二五八頁2行)

*『うつほ全』頭注：底本は、「シミサシ」と傍書する。「二月」を補って解した。

②かすかより帰給ける 〽かへりあるしいかめしく、——かすかより給ける。との〈空白二字〉、かへりあるしいかめしく、(二五八頁3行)

*『うつほ全』頭注：諸本欠字。底本は、「同」と傍書する。「にて」を補って解した。

③本ノマ、——本ノママ(一六〇頁17行)

*『うつほ全』頭注：以下、底本、この丁空白。底本は「本のマ」と記す。

④いといかめしうはあらぬか シメシメものなま物なとして、——いといかめしくうはあらぬ、か〈空白二字〉もの・なまものなとして、(一六四頁15行)

*『うつほ全』頭注：「か」の下、諸本欠字。底本は、「シミサシ」と傍書する。「ら」を補って解した。

これらの例から、柏亭本と前田家本とが近いことがわかる。ただ、どちらかがどちらかを補える形が一つでもあれば、本文を整えていく指針が見いだせたであろうことも慮られる。

三 左大将と右大将の問題について

春日詣巻では、源正頼と藤原兼雅の官位が、従来問題となっていた。というのは、俊蔭巻で語られる正頼は左大将であり、兼雅は右大将であるのだが、春日詣巻では逆転しているのである。春日詣巻以降をみると、蔵開・上巻で正頼は左大将を辞しており、その時に際して兼雅が左大将に昇進している。

この問題については、春日詣巻の底本の前田家本文を尊重して正頼を右大将に、兼雅を左大将とする説と、左右逆にするという校訂を施す説とがある。そこで、柏亭本の本文はどうかというと、春日詣巻では前田家本と同じく正頼が右大将であり、兼雅が左大将となっている。異本注記や疑問が付されている箇所もなく、春日詣巻においては、柏亭本においても他の巻と左右が逆転していることがわかる。右近少将源仲頼と左近中将源祐澄についても、前田家本との異同はみられない。

四 「桂」の段重複現象について

『うつほ物語』には、いくつかの錯簡や重複部分が存している。

その一つが「桂」の段をめぐる問題である。これは、春日詣巻の巻末部分が沖つ白波巻の巻末部分と重複していることを指す。この要因については未だ決着を見えおらず、課題として残されているのであるが、沖つ白波巻の巻末部分は話題の展開に沿わないという理由

で削除される傾向にある。本稿では、柏亭本と前田家本との形態を比較することで両本の近接関係を見るにとどめておく。

『本文編』を見る限りでは、柏亭本の重複の形態は前田家本のそれと似通っている。まず、沖つ白波巻の巻名として、前田家本では「おきつしら波しらなみの」とあり、柏亭本では「おきつ白波しろなみの」とあって、両本一致している。また、重複部分も両本ともに、春日詣巻の巻末に位置する「桂」の段と呼ばれる少し前の部分「藤のかゝれるを」から巻末までが沖つ白波巻の巻末にも存する。また、「桂」の段に入る前に「本ノマヽ」と記され、丁が改められているのも一致する。

『本文編』では、沖つ白波巻の重複本文は削除されるという校訂がほどこされておき、巻末に付録として該当箇所が載せられている。そこで今回、参考として以下に柏亭本における該当部分の翻刻を付すこととした。なお、春日詣巻との異同のみられる部分については、傍線および傍注を施した。また、『本文編』を参考にして、句読点および鈎括弧を付した。絵解と思われる部分は（ ）で示し、朱の書込は「」で示した。

藤のかゝれるを、松の枝ながら折てもいまして、花ひらにかくかきつく。

「おく山に幾よへぬらん藤の花かくれて深き色をたにみてかくなんとたに」とて、そわうの君に、「是御らんせさせ給ひて、

此花給りてをき給へれ。今、たゞ今」とて、内に移りぬ。あて宮御覽して、人々の中に、こともなしとおほす人なれば、かく書つけたまふ。

深しともいかゝ頼ん藤の花かゝらぬ山はなしとこそきけそわうの君、なかつにみせ給けり。

右近少将なかよりも、年比、いかて聞えんと思しかと、つゐてなくおほされん物から、かしこきに、思ひ忍ひて有しを、此のり弓のみあるしにかいまみて後は、ふしつみ、病に成て有しを、殿かすかまうてにからうして起あかり「たり」しになくさみてあれと、猶、え有ましかりければ、おかしき柳の萌出たりけるに書付たり。

物思ひの枝にこまれる物ならはもえ渡る共みせずそあらましとて、いつあこ君に、「是、なかのおとゝにもて参り給へ」とて奉る。あて宮見給ひて、「あなむくつけ。見るましき物哉」とて引結び給ふつ。

侍従の君、

人しれぬ涙の河となかるゝをいかてたまれる水とこたへん例の、こたへ給はず。

ゆきまさ、かく聞えたり。

玉つさの終にとまらぬ物ならはむなしきみとも成ぬへきかな返しなし。

左大将殿、かつらに、面白き所に、おほいなる殿作りて、花盛

・もみぢさかりなどに物し給て、心やり給所有。花さかりなれば、此比、なかつたの母北方をみておはして、心やり、あそひ給。

「あやしう、世中忘れ、心ゆく所にこそ在けれ。此春・夏、こゝにて過さん」とて物し給に、花の、色を尽して味ましり、水はいとみだれたるやうに流いりて、いと面白し。あるしのおと、
「あやしう、み所有所哉。こゝにて、おかしきわざをして、上手とも物の音をきかせ奉らはや」との給に、けに北方、花ちらぬさき、人々なとして見せ給へ」ときこえ給。

此大将も、あて宮に文奉り給へと、御返なきを、猶、此かつらよりも聞え給。

鶯のふみもかよはて年ふるは花無里とおもふなるへし

あてみや、

かつらとてなつかさらなん鶯は月のうちこそ聲は聞えぬ

と聞え給。

大将のおとみ給て、「あやしう、またわかくおはするを、御形より始、しいて給傳も、あらまほしく物し給哉。いかて此君もかな。わか君とひとしくてあらは、いかに、人おとろかん。

『いはゆるあて宮をいて、なを(二字空白)たえぬ人、このしゝうの母こそまざるへけれ。ひとときは、めつらしきをこそ思ひまざる、心にくしや』などこそそのししらめ。いかにすあらん。ねたうし給へかし」。北方、「けに、あらは、いかによからん。まめやかに聞え給へかし。こゝに、いかてさも物し給はなんとこそ

思へ」。おと、
「ひとりにならひて、それも、思ふ事あらしや、

さも、なの給そ」。北方、「あやし。なとてか、さはあらん。

あまたとも、ありかうにこそあらめ。さあらてもこそ在しか。忘

給はすは、阿をか思はん」。おと、
「それは、さらなりや。

思ぬれば、いとみしや」とて、涙をおとして、かくの給ふ。

消かへりかくのみ在し古をかけて聞にもまして見たる、

とて、「世中は、心にもあらぬ「物」也。さ計いみしく思ひながら、

など、さは有けん。いてや、是も思へこそ、天下のあて宮

にも思ひ聞えけれ。惜、さる志の、年月にそへてまさりしかは

こそ。此一^{てう}条に物し給人々も、いづれ心ざしふかく思ひ聞えし。

さあまたにくはりし心を、只一所に成たりかし。女ひとりみる時

はなりけれと、御よにこそ、かくてあれ。是そ、惜よりいみしか

りし志はみ給へ」など聞え給。北方、「いてや、それもかひなかり

りきや」とて、

なかつたふねうく計在しかと尽せずおちしわか涙哉

との給。おと、
「理や。あか仏。されとおもひをこたらざりし

をのみたのみし」とて、

年をへてたえず流し涙にも舟のうかはぬ時はなかりき

との給ひて、むかし、おほつかなかりしよに、これもかれも、物

のおりふしことに思ひあつめたりしことゝもを、かたみにいひつ

ゝ、みすのもとに出みて、ひは、筐のこと・やまと琴とをひとつ

に調あはせて、おもしろき手をひとく。

へよきたいともをあまたたて、かたき物ともをあまたもりすへ、きよきよなる御そともをかけたして、いてゐ・すのこには、おとな計、こうちき一かさね・すりもきたり。よきわらは四人、あをし、あはせの袴・こきあこめなときて出入、花の陰にあそひて、いみじき昔語をし、哀なる行末を契してゐ給へる。

夕暮の程に、内に、おと、久く参り給はぬ事を、御門、右のおとへの給、「右大将久くまいらぬ哉」との給へは、おと、
「かつら河わたりに、けう有所をもて侍り。た、今、そこになん花み給へんとて、日比侍りたふ也」。御門、「さいなとも、いづれをめて物すらん」。おと、
「なかつらかけをなんぬてまかりける」。うへ、
「それを思ふなかりな」。おと、
「只今、かれ独をなんもて侍なる。ほんさいともみな忘侍て」とそうし給へは、「いと興有こと哉。また、『かの大將の、めひとりもたる』と聞えず。三宮を思ひし時も、十七、八人計もてありしを、いかなれば、只独には成たらん。そのみこを忘るはかりの心にてきよ。なかつらか母には、昔よりあかぬことなく聞えし人ぞ、いかてえんと思ひしを、まいらせす成にし人を」とて、上、「猶此人なやましにやらん」とてか、せ給ふ、
「月にたによらす成にし白雲の谷に年々と聞は眞か
いと心つよけ地しを、いかて、は」など書給て、右近少将なかよりに、「是、かの桂の家に物して、内の防にとらせよ」とおほせ給。なかつらよりいそきて出る陣にて、ゆきまさ・すけすみの中將・

なかつらへまうて給。

道の程あそひてくる音聞召て、「侍従のまかつらにそあなる。

ゆつけまうけさせよ」との給程に、面白き花の枝に御文つけ、

使の少将参り給へは、あけたるみすおろして、とに出給。こたち、

みな内にいりぬ。

かくて、すのこにぬぬ。御どもの人は、花の陰にすへたり。なかつらより、御文を内にいるれば、おと、いとみまほしくおほさるれと、え入給はず。比の方、御文をみ給てわらひ御ふみ。

さて、うちより、いと、物まいる。したんのをしき、ちんのたいにすへて、八、つくえ、いとかめしうはあらぬ、から物・なま物なとして、よきうなひと、かきりなくさうそかせてまいらす。御かはらけ度々になりて、御使の少将いそきたまふに、「なと、かくはいそぎ給。花をみてこそかへり給はぬ」とて、かはらけ給ふとて、

いそぐ共花にまかせん匂ふ宮みつ、や人のかへる共見ん
なかつらより、「さかは」などいひて、

花のかを尋てきつるかひもなく匂ふにあかて我やかへらん
すけすみ、

かくなからちらすと思は、桜花陰にて干よをめぐらさらめや
なかつらみ、

此宿に匂へる花のいかなれはおつる雫も玉とみすらん
ゆきまさ、

松風のひゞきのこれる宿にしものとかにさける花の色哉（注）
なかつた、内にて、よますなりぬ。

かゝる程に、少将、「久くなりぬ。いとかしし」とていそげは、比方、うちの御返、

白露のやとるも嬉し俗といへど空にし月のかけもみゆれはと
きこえ給ひて、あやかいねりのうちき一かさね、はかまくしたる
女のさうそくくたりかつけ給ふ。いそぎ参りぬ。こと人々と、
め給ひて、あそひあかして、つとめてかへり給ふに、同じやうな
る女のさうそくかつけ給。

おわりに

柏亭本春日詣巻は、藤原の君巻・忠こそ巻と同じく前田家本とかなり近い所に位置しているといえる。本文上の異同が少ないこと以外に、前田家本と柏亭本の本文がともに同じ箇所において乱れている場合が多々みられることも春日詣巻の特色の一つである。

また、俊蔭巻・藤原の君巻にみられた「ほに」という語句が、忠こそにおいては用いられていないことを前稿で指摘したのであるが、今回、春日詣巻での使用状況は、忠こそ巻と同じく「ほに」という語句はみられず、前田家本・柏亭本ともに「程に」に統一されているという結果となった。

今後、巻を重ねる毎に、全体としての位置を視野に入れながら調査を進めていきたいと考える。

〔注〕

(1) 拙稿「柏亭本『うつほ物語』(広島大学蔵)の特色(その一)——俊蔭巻本文の前田家本との比較を中心に——」(『古代中世国文学』第十一号 平10・4)、「同(その二)——藤原の君巻・忠こそ巻——」(同第十五号 平12・7)。

(2) 前見返し袋綴外側には「第四 春日詣」と書かれ、内側には「むかし式部大輔左大弁かけたる」という俊蔭巻冒頭部分が書かれているのがわかる。

(3) 「前田家本『うつほ物語』はどのような本か」(『物語研究会会報』第二八号 平9・8)紙上における、室城秀之氏の分類(一行におさめる(一行型)、一行で書き切れない場合に次の行の行頭へ続けて二行にまたがらせて書き、続く本文は次の行の行頭から書く(二行断絶型)、二行にまたがらせて書き、和歌に続く本文を二行目の和歌の後に続けて書く(二行連続型)の三通り)の分類に従う。

(4) 諸本の巻序を整理したものに『日本古典文学大系 宇津保物語一』(河野多麻校注 昭34 岩波書店)がある。

(5) 日本文学研究資料叢書『平安朝物語II』(昭49 有精堂)所収。

(6) 前田家本本文の引用は、尊経閣文庫蔵前田家十三行本を底本とする『うつほ物語の総合研究1 本文編上』(室城秀之・西端幸雄・江戸英雄・稲員直子・志甫由紀恵・中村一夫編 平11

勉誠出版)に拠る。以下本稿において『本文編』という時には本書を指す。

(7) 前掲(4)の該当箇所における注記によると、「さほ姫の」の歌が「おとろうむめ」の題とその歌「しろたへの」との間に位置する本が延宝五年板本・大橋長憲本・新宮城書蔵本・榊原本(其一・二)・狩谷椽斎本・紀氏本、「さほ姫の」の歌があるべき位置に二行文の空白がある本が猪苗代兼寿本、同じく一行文の空白がある本が内閣文庫本であると指摘されている。

(8) 『うつほ物語全』(室城秀之校注、平7 おうふう)を指す。

(9) 前掲(4)の該当箇所における注記によると、「や」を有する本文は大橋長憲本傍書・荷田在満校本・玉琴であり、「は」を有する本文は流布本系の本であり、「の」を有する本文は九大本であると指摘されている。

(10) 室城秀之氏は、「源正頼は、「左大将」か「右大将」か」「国文白百合」24号 平5・3、『うつほ物語の表現と論理』平8所収)において、前田家本文を尊重すべきであると述べておられる。

(11) 上坂信男氏「宇津保物語「桂」の段をめぐる」(「文学・語学」1号 昭31)の論などがある。

——いかわ・ゆうこ、広島大学大学院博士課程後期在学——